

## 近江の戦国時代② 浅井氏の台頭

応仁文明の乱以降、室町幕府の権力が失墜する中、地方豪族が力をつけ、時には主家を凌ぐようになりました。これは、江北に再び安定した政権の確立に成功した京極氏においても、例外ではありませんでした。

大永三年（一五二三）の大吉寺梅本坊公事以降、江北では浅井氏が台頭していきます。その中で、京極氏は浅井氏に「御屋形様」として象徴的に扱われるに留まり、浅井長政の代には完全に京極政権としての姿は消しました。

こうして、京極氏が没落し、浅井氏が勢力を伸張していきましたが、この政情の変化について六角氏が度々、江北を攻めました。しかし、京都の情勢にも注意を払わなければならなかった六角氏は江北に兵を留め置くことができず、最後まで近江を制圧することができませんでした。

永禄六年（一五六三）、六角氏当主

鎌刃城跡で行われた発掘調査の結果、従来の通説で織田信長の安土築城（一五七六）以降に用いられるようになったと考えられていた礎石建物や枳形虎口、石垣といった遺構が、鎌刃城から検出されました。また、鎌刃城が廃城となった時、信長によって徹底的に破壊（破壊）された様子が明らかとなりました。



鎌刃城跡主郭虎口

義賢の子・義治が、重臣後藤氏の権勢を恐れて謀殺したために、家臣団の反発を招き（観音寺騒動）、以後、六角氏は衰退していきます。さらに、浅井長政の進出、ついで織田信長の攻撃を受け、永禄十一年（一五六八）、ついに鎌倉時代より近江で権勢を振るった六角氏の時代は終わりを告げました。

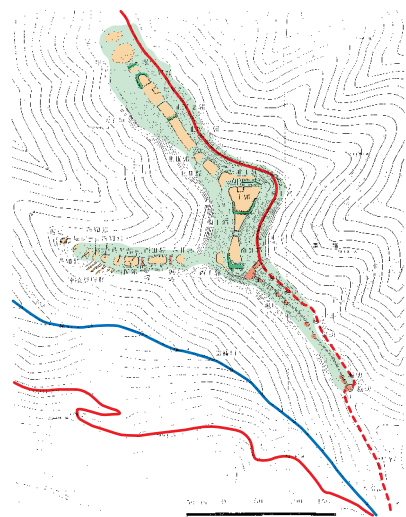
## 江南・江北境目の城

### 鎌刃城【県史跡】

坂田郡米原町番場

中山道番場宿より南東の山稜部に鎌刃城跡は存在します。築城年代は不明ですが、応仁文明の乱の際に、京極氏家臣が、城主堀次郎左衛門を討つたとの記録が存在することから、この頃には築城されていたものと考えられます。

鎌刃城は江北・江南の境目に位置することから、京極氏と六角氏の争いの中で、帰属を度々変えてきました。



鎌刃城跡平面図

永禄二年（一五五九）には、城主の堀氏は浅井氏に属していましたが、織田信長に内応したため、浅井長政に攻められ、元亀元年（一五七〇）に落城します。しかし、同年の姉川の合戦に勝利した信長は、再び堀氏を城代に据ええました。そのため、再度、長政の攻撃を受けましたが、木下藤吉郎の援軍により、辛くも落城を免れました。

天正二年（一五七四）、城主の堀氏が信長に改易されると、その後は記録に現れなくなったことから、まもなく廃城になったものと考えられます。

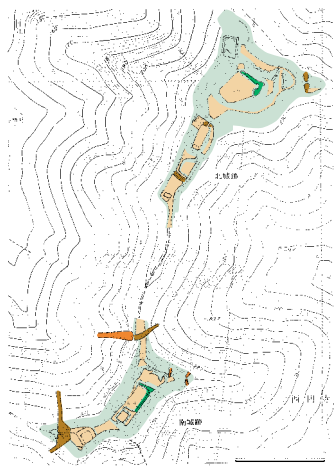
## 太尾山城【町史跡】

坂田郡米原町米原

太尾山城は米原駅の東に聳える太尾山にありました。築城年代は不明ですが、在地土豪であった米原（よねはら）氏によって築かれたといわれています。

文明三年（一四七一）には美濃の守護代斎藤妙椿が近江に侵攻し、米原山で合戦したとの記録がありますが、この米原山が太尾山ではないかと考えられています。また、大吉寺梅本坊公事以降、弱体化した京極氏の隙をついて、六角氏は江北に勢力を伸ばし、太尾山城は六角氏に属するところとなりました。永禄四年（一五六一）に浅井長政の太尾山城攻略が成功し、中嶋宗左衛門尉直頼をいれおきますが、元亀二年（一五七二）、信長による浅井氏攻めの際、佐和山城が開城すると、宗左衛門尉も太尾山城を退き、以後廃城となりました。

太尾山城は北城と南城から構成される「別城一郭」構造をとっており、土塁、曲輪、堀切などが確認できます。



太尾山城跡平面図



太尾山城跡南城礎石建物